

黒須紀郎

Kurosaki Kichiro

天保

蘇民伝

戯れせんや



黒須紀一郎

天保  
蘇民伝

なま  
戯れせんとや





黒須紀一郎（くす・きいちろう）

本名 黒須孝治

一九三二年、千葉県生まれ。

一九五五年、早稲田大学文学部卒

業。日活株式会社入社。映像本部

企画部長、テレビ本部企画部長を

経て現在フリープロデューサー。

著書に『元禄蘇民伝』（河出書房

新社）。

天保蘇民伝

戯れせんとや

一九九四年一〇月二五日 第一刷印刷

一九九四年一〇月三〇日 第一刷発行

著者 黒須紀一郎

発行者 和田 肇

発行所 株式会社 作品社

東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ四

〒〇三三電話 〇三三二六二一九七五三

FAX 〇三三二六二一九七五七

振替口座 六二二七一八三

本文印刷 シナノ印刷

カバー・扉 栗田印刷

製本所 小泉製本

落・乱丁本はお取り替え致します  
定価はカバーに表示してあります

天保蘇民伝／目次

|     |      |      |     |        |     |     |
|-----|------|------|-----|--------|-----|-----|
| 七   | 六    | 五    | 四   | 三      | 二   | 一   |
| 占い師 | 後宮の女 | お救い様 | 一揆  | 世直し大明神 | 神隠し | 穴太衆 |
| 196 | 166  | 150  | 112 | 69     | 18  | 7   |

八 蘇民将来 228

九 偽情報 257

十 飯母呂お葉 288

十一 戯れの終わり 337

あとがき 348

参考資料

裝丁 菊地信義

天保蘇民伝

——戯れせんとや



一 穴太衆あのを

浅草藏前通りを北東に進むと、間もなく右側に駒形堂が見えてくる。

白壁の美しい宝形ほうぎよう土蔵造りのこのお堂を、江戸っ子たちは、「こまんどう」と呼んで親しんできた。川向こうの本所から眺めた駒形堂の風情もまた格別なものがあり、俳人・墨客たちの格好の題材となっている。

“君は今駒形あたりほととぎす”

仙台藩主伊達綱宗だてつなむねを想って、吉原の太夫仙台高尾が詠んだ句という。高尾の哀憐の情を彷彿ほうふとさせる駒形堂の姿だ。

駒形堂は浅草寺の聖地でもある。浅草寺のご本尊は、海中より出現したと、伝えられている。その場所がこの地である。だから江戸っ子たちは、浅草寺発祥の地として、この駒形堂を敬っている。

ここには、対岸の本所へ渡る渡船場もあって、人々の往来も多い。

穴太屋曾来は、女房のお蓮と連れ立って、駒形堂から出てきた。隅田川の川面を渡る風が、二人の頬を撫でて過ぎる。二人は目を細めた。微風が心地よい。

お蓮の髪には、珊瑚の宝玉をつけた簪が無造作に差してあった。歩く度に着物の裾が割れて、肌着の緋縮緬がちらりと顔をみせる。

度重なる奢侈禁止令で、着物の表地を飾ることは出来なくなっていた。そのため、華美な装いは内へ内へと籠もり、ついには下着と小袖の裏地に、贅と趣向を凝らすようになった。

お蓮は曾来と肩を並べるようにして歩いていた。薄地の黒い絹の着物がよく似合う。背筋を真つすぐに伸ばし、無駄のない歩きであった。お蓮は瓜実顔で、すらりとした色白の美人である。年齢は三十二歳だが、相応の貫禄もある。特に、口元と目元に意志の強さが表われていた。曾来は四十歳にはまだ二つ間がある。背丈は五尺七寸（約百七十三センチ）と高い。引き締まった筋肉質の体型である。肩幅も広い。絹の着物を通して、鍛えた体軀が透けて見えるようだ。顔は温和な町人のそれだが、切れ長の目には鋭さがあった。

歩きながら、曾来は空を見上げた。相変わらず厚い雲が江戸の町を覆っている。

この年は短い夏であった。八月の終わりと言えば、まだまだ暑さが厳しい筈なのに、朝夕は

肌寒かった。梅雨時のような空がいつまでも続き、夏の太陽はめったに顔を見せなかった。

——飢饉。

おびえが人々の表情を暗くしていた。

曾来とお蓮はゆっくりと歩を進めた。顔見知りだが、二人に丁寧な頭を下げてすれ違った。中には、わざわざ近寄って来て、挨拶する者もいる。

二人は、黒船町へ向かった。浅草寺とは逆の方角である。黒船町には、曾来の屋敷がある。下町っ子はこの屋敷を、大名屋敷並みに「穴太屋の下屋敷」と呼んでいた。

穴太屋は江戸でも屈指の大店である。

この当時、江戸には「十八大通」と言われた豪商がいた。「大通」とは、「諸事に事馴れて、よく捌けたる者。関東にて通り者と云う」と、『待乳問答』に記されている。

本来は世の中の変化に機敏に対応し、適切な処置の出来る人間のことであった。が、この時代の大通とは、金を湯水のように浪費し、歌舞伎役者風の出で立ちで、遊里に豪遊する者たちのことをそう呼んだ。

穴太屋はこの十八人の中には入っていない。曾来は「大通」が嫌いなのだ。しかし、穴太屋の財産は、それら「大通」に少しも劣るものではなかった。

曾来とお蓮は、駒形町の町外れを左に折れて、隅田川の土手沿いの道に出た。雨期が長かったせい、大川の水嵩も増して、流れも急であった。水の色も茶色く濁っている。

ふと、曾来は足を止めた。

視線の先に、一輪の川原撫子かわらなでしこの花があった。群生する薄すすきの中から、桃色の顔を覗かせていた。

曾来は屈み込むと、花に顔を近付けた。その途端、花が微かに揺れた。曾来は口元を緩め、目を細めた。

「来てみねえ、お蓮。可愛いもんじゃないか」

曾来が背後のお蓮を誘った。

お蓮も曾来に並んで腰を屈めた。また、花が揺れた。

「おや、ちゃんと挨拶してるよ」

お蓮も目を細めた。

「大奥の御女中どもがどんなに着飾っても、この花にはかなうまいな」

「ほんとに、なんていう可愛さだろうね」

お蓮が、花の上で手を動かした。触ってみたいのをじっと我慢している仕草であった。

鉛色に曇った空、濁った水を湛えて流れる隅田川。しかし、撫子の花はそんな色を跳ね返して、純であった。

曾来夫妻は、四半刻（三十分）あまりその場に佇<sup>たたず</sup>んでいた。

その夜、穴太屋の下屋敷は、宵の内から煌々と灯りが点っていた。

五千坪はあろうかという広大な敷地である。その中に、表二十五間（約四十五メートル）、奥行三十二間（約五十七・九メートル）の建物がある。書院、数寄屋、小座敷、能舞台、居間、小書院が組み込まれている。玄関は二間に五間。他に別棟として風呂屋があり、屋敷の北側には二つの大蔵が並んでいる。東南の隅田川に面した敷地は石庭になっている。いかにも石積みの

穴太衆らしい趣向だ。

この夜は、幕府の要人を招いての宴会であった。

こんなことは別段めずらしいことではない。仕事柄、幕府高官との関係は不可欠である。穴太屋の仕事の大半は、公儀発注の仕事であった。

贅を凝らした客間に、二人の武士がいた。普請奉行と材木石奉行である。その前で、曾来とお蓮が二人に、赤い酒を勧めていた。オランダ商館の医師シーボルトが、土産に持ってきた逸品であった。ワインの芳香が部屋の中に満ちて、要人の顔も上気していた。

頃合を見計らうと、曾来は手を鳴らした。

背後の襖が音もなく開く。

二人の武士が視線を向けた。

畳の上に、微かな衣擦れの音がした。畳は、金欄の縁のついた極上の備後表だ。

女が二人現われた。新吉原の太夫風に着飾っていた。『好色諸国物語』に、羅綾のうちかけ錦繡を重ね、たいまいの簪後光の如く、奸媚たる容色魂を奪う、とある。たいまいはべっ甲のことであり、奸媚とは、月光のように美しいさまをいう。今、二人の目の前にいるのは、まさしくこの記述そのままの美女であった。

女は見事な身のこなしで、二人の奉行の前に手をついた。動きに一分の隙もなかった。

「吉原松葉屋の太夫、萩野でありんす」

「尾張屋の太夫、玉夕でありんす」

男を浮き立たせるような声である。

雅びな衣装に薰き込まれた香が、奉行たちの鼻孔をくすぐった。佳人の磨き抜かれた顔が、奉行に向かつて微笑みかけた。

奉行は、瞬きをするのも忘れていた。世事に慣れ、遊里に慣れている筈の二人であったが、目の前に出現した女には驚愕した。

——何と、これは！

奉行らは唖って曾来を見た。

曾来とお蓮は、にこやかに頷いた。

萩野と玉夕が奉行に酌をした。

受ける二人の盃が僅かに震えた。

本来、こういうことはあり得なかった。初会の男に、例えそれが大名であろうと、吉原の太夫が酌をするなど考えられないことであった。それだけの權威が太夫にはある。

——本当に吉原の太夫だろうか。

奉行らが訝るのも無理はなかった。

吉原の掟では、遊女が廓の外に出ることは固く禁じられていた。まして、当代人気随一の萩野と玉夕である。その格式からいって、町人の屋敷に出向く筈がない。

しかし、目の前にいるのはまぎれもなく萩野と玉夕なのだ。偽物とはとても思えない。二人には、それなりの気品と風格があった。一つ一つの所作も流儀に叶って優雅であった。

——穴太屋ともあろう者が、嘘をつく筈がない。

奉行らはそう思うと、改めて金力の凄さに度胆を抜かれた。

二人の太夫を廓から連れ出し、しかも一見の客に酌をさせ、一夜を共にさせる。生半可な金で出来る芸当ではなかった。

奉行らは、その目も眩むような金額を思い浮かべようとしたが、止めた。どうせ彼らの想像を遙かに越えた金額に決まっている。

今宵の宴は、彼らにとってこの世の極楽となった。萩野が鼓を打って、玉夕が舞った。南蛮の赤い酒に酔い、豪華な料理が口の中で溶けた。日本橋の魚清から出張して来た江戸一番の板前が、料理の腕を揮った。

そして深更、奉行らは、それぞれの太夫を抱いて竜宮城の中にいた。

寢室の天井はギヤマン張りの水槽になっていた。その中を、めずらしい異国の魚が泳いでいる。曾来が南蛮の商人に注文して造らせたものだ。恐らく天井に仕掛けがあるのであろう。水槽は淡い灯りを受けて、幽玄の世界を広げていた。

その下で、奉行らは太夫との同衾に夢幻の境地をさまよっていた。

翌日の昼四ツ（午前十時）頃、二人の奉行はけだるい体を駕籠に沈めて、帰って行った。

この一夜の接待にどれほどの金を費やしたか、それは曾来夫妻にしか解らなかった。しかし、それでも曾来の損得勘定からすれば、奉行二人から穴太屋が得た利益のほんの一部を浪費したに過ぎなかった。

曾来の職業は、その屋号が示す通り、石積みである。

「穴太積み」という独特の石積み工法で世に知られている。安土城、大坂城、江戸城などのあ

の堅固で美しい石垣は、皆この穴太積みによってなされている。その工人は穴太衆と呼ばれてきた。

彼らの本貫（本籍）の地は、近江の坂本である。琵琶湖の西、湖西に沿って带状に延びる丘陵が、比叡山麓だ。その中心地が坂本であり、更に西へ半里（約二キロ）行った所に穴太の里がある。

『新撰姓氏録』に穴太村主すぐりという名が見え、出自は「後漢孝献帝也」とあるから、いずれにしても渡来系の氏族のようである。

古くは、比叡山延暦寺や日吉大社に属し、その石垣造りに関わったものと思われる。また、「村主」という姓は、特定の職業部を管理する氏族だという説もあるから、穴太村主は石積みの技能をもって朝廷に仕える集団だったのかもしれない。

中世になると、穴太の散所法師さんじよほうしが、朝廷へ押し掛けようとする僧兵らの強訴を邪魔した、という記述が『続正法論』に出てくる。

比叡山や園城寺、高野山などが抱える僧兵の力は、時の朝廷をも震撼させたほどだ。白河法皇をして、ままならないのは加茂川の水と賽の目と山法師、と嘆かせたほどである。この僧兵の邪魔を、穴太の散所法師がした、というのだから、穴太衆の力も侮れぬものを持っていたに相違ない。

ちなみに「散所」とは、古代・中世の荘園を意味する。朝廷や貴族、寺社などの領地には本所と呼ばれる荘園と、あちこちに散在する散所があった。散所は年貢を徴収しない土地であり、散所の民は代わりに雑役をもって荘園主に奉仕した。